

1990. 10



はるかにくす

No. 23

学校法人大阪工大摂南大学図書館報

絵画の遠近法と五感

人間の目と物体の間に、透明な平面をたてこれに投影された形が透視図、つまり西欧の遠近（図）法の原理です。

この方法は、ルネッサンスにおける近代科学主義と人間中心主義への、思想願望から生み出された方法ですから、人間の視覚が、対象としてとらえた物体を、見えるがまゝ、正確に平面化するという事に関して、合理的な普遍性をもっています。

ところで、人間が物体を意識して眺めるということは、知覚するという事です。この知覚から視覚の側面をとり出して、そのメカニズムを分析して調べ、法則性をみつけ出したのが、遠近法であるとも言えます。

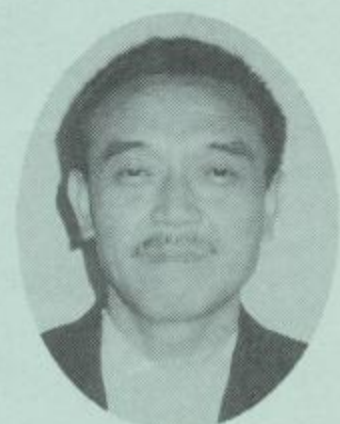
この時、物体は固定化、対象化されていますので、物体（目）と物体（対象物）との関係性のみが分析され、法則が見出されるのですから、すべての科学的方法論と同じやり方であることは申すまでもありません。

西欧において、画家は長い間、また日本の画家も江戸時代末期から、この知的方法を表現の手段として用いています。現在もその影響下にあると申せましょう。

けれども、現実の世界を私達が知覚する通りに表現しようとするとき、遠近法は完全でしょうか。現代は、科学主義優位の時代です。私達には、物体を固定化し、対象化して自分と切り離してみる癖がついています。それで画家達のなかにさえ、この方法を利用して何んの不満も生じない場合があるのではないで

建築学科教授（短大）

小豆島 一男



しょうか。

しかし、例えば、私が松林のなかを散策しているとします。私の視覚は近くの松、なかほどの松そして向うに広がる空をみて、あゝ、なるほど、遠近法の通りであると感じるでしょうが、同時に、私は、眼前に広がる松林と一体になって、つゝまれている自分をも感じます。これは知覚しているということなのです。

松の香り、音、風などについて五感の全てを働かせて感じる知覚です。ベルグソンも言うように、物体の物理的物体概念も物体の一つのあり方ですが、知覚されたまゝの物体もれっきとした物体のあり方と考えられます。

以前、高島屋でセザンヌの松林の風景画をみた時、まぎれもなく松林の中にいるときに感じるある一体感を観じました。セザンヌの絵は、遠近法の見方からすれば少々異ってみえますが、私達が物体をみて知覚するレベルでみれば、全くの共感へと導びかれます。彼は人間の五感をめぐらせて対象と言葉を交わしえた画家ではないでしょうか。

ルネッサンス時代の画家達が知覚するという文脈で、知覚された事物を平面に表現しようと考えたならば、西欧の遠近法は生み出されてこなかったかもしれません。生み出された場合は、異った種類の遠近法になるはずで

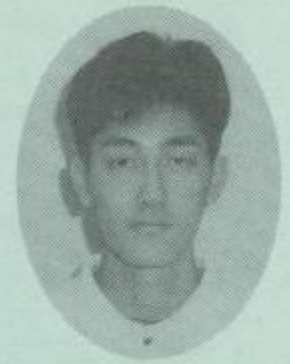
図書館で自分を磨こう

貴重な大学の4年間、テレビばかり見てゴロゴロしては、時間がもったいないと思いませんか。「これではいけない。」と思いつつ、いつまでたっても行動に移せない重い体を持つ方々は、恐らく目標となるものがないのでしょう。そこで、目標のないあなたの目標として、しばらくの間、毎日30分間、図書館へ行かれる事をお勧めします。

1回生の方はまだまだですが、上級生になるにつれ、特に4回生の方は、卒業後の自分を考えることになります。就職や進学する際に「もっと勉強していれば…」とか「知識を身につけておけば…」といった悩みが増えてきて、手遅れかなと思いつつ、試験前日のように、必要に迫られて、丸覚えに近い本の読み方をする人がまだまだいます。実は、僕もそのうちの1人というわけですが、どうも性格が暢気なのか、日が迫ってきて、気分的に緊迫した状態にならないと勉強できない、或いは、本を読まないの、試験なんかでは、前日になって初めて見るページが沢山あったりすると、焦って読み流すものだから印象が浅く、又、丸覚えなどのように、何故?、どうして?といった疑問を持たず、

工大・ID4

瀬古 勉



ただ闇雲に覚えたりで、すぐ忘れてしまいます。こんなことを繰り返しているから、本に書かれている興味深いことや、考えさせられる内容を読みこぼしたり、丸呑みをする鵜のように読書をしたりで、本当の面白さがわからないのに、「この本は面白くない」と言って、『つん読』（積んで置くの意味）状態になってしまいます。

研究などにもあてはまるのですが、それらは、まず自分なりに疑問や見解を持つことに始まるので、疑問がないと、いくらすごい事をやっても、他人の模倣に過ぎない。他人の模倣は、目標のない人におこりがちなので、すなわち、疑問を持つ機会に巡り合う回数が少ないほど、画一化が進み、自分の目標を見失いがちになると言えるでしょう。

そこで、時間のあるときは、図書館でゆっくり本を読み、その内容に対する自分なりの見解や、疑問を持つ事で、自分の本当にやりたい目標が浮かび上がってくると思います。そのような意味から、図書館は、自分を磨く最高の場であると思います。



『十字架の男 ベン・ジョンソン』

山本 茂 著

(毎日新聞社)

1988年9月24日、土曜日。

午後1時30分から男子100メートル決勝が始まる。準決勝で、ベン・ジョンソンは平凡に走り、1、2組の合計で2位。1位は、ただひとり9秒台で走ったカール・ルイスだった。

そよ風が吹き、薄曇りで気温も25度に近い。彼の最も好む気象条件である。

そして、時間。スターターのピストルが炸裂し、ジョンソンが真っ先に飛び出した。絶妙のスタートではなかった。ルイスとの差は、わずかで

ある。ゴールが近づくにつれ、差はさらに広がる。ルイスの顔に緊張が走り、滑かさが消えた。差がさらに開き、そしてゴール。ジョンソンの右手が自然に上がり、人差し指が「ナンバーワン」を示したままゴールラインを切った。スタジアムの電光掲示板には「9.79秒」の世界新記録が表示されている。満場がどよめき、世界中が彼の記録に驚嘆した。そして翌日は、彼の功績で世界が賑わうはずだった。が、それは、予測とはあまりにもかけ離れていた。彼は、禁止薬物を使用していた。メダルは剥奪され、過去の記録は、すべて幻と消えた。

参加することに意義があったオリンピックにいつの頃からか、金のなる木が植えつけられてしまった。彼は、あの事件で天国と地獄を味わい、カムバックを目指し、再び走り始めたという。

[請求番号 782.3 Y 第1図書室] (K. W)

シリーズ 淀川ぶらり散策

第14話

「大阪城 その4 秀吉と利休 1」

浅井三千治

「リキュウ」、「リキュウ」という人声に、午後のまどろみの中にあつた淀の流れは、なつかしい響きを覚えた。「ハテ、リキュウとな!!」「おお、そうじゃ!! 大坂城の金ピカの天守の上で秀吉とか言う小男が、有頂天になっていた頃、城の山里丸で茶を点てていた、あの利休、宗易のことか——。あれから何年たつのかな。」としばし、もの思いに耽っていた淀の流れであったが、やがて何事も無かったかのように、再びたゆたうと静かに流れ続けている。

秋ちかき 心の寄や 四畳半 芭蕉

今年は、利休没後400年にあたる。茶聖利休。映画も2本上映された。その他にも数々の催しが行なわれ、利休はちょっとしたブームである。今日の日本文化の形成と芸術に、大きな影響を与えた茶の湯の世界、利休の到達した世界とは、単に茶を点て、茶を喫する世界ではあるまい。それは、美の世界なのであろうか。心の世界なのであろうか。

茶の湯とは ただ茶をわかし茶を点てて呑むばかりなり 本と知るべし

天守閣がそびえる城の一角に設けられた数寄座敷群を、山里丸と呼ぶようになったのは、秀吉の築いた大坂城が最初と伝わる。そして、秀吉はその後も聚楽第、伏見城や朝鮮出兵のため築いた肥前名護屋城にも山里丸を設けているが、それは利休の影響を受けてのことらしい。

利休は元々は今井宗久、津田宗及らとともに信長の茶頭(さどう)であった。いずれも堺の町人出身の茶人であり、政商である。本能寺の変後は秀吉の茶頭として仕えることとなったが、秀吉の代になってからは、利休が秀吉の最良を

得て、大きく台頭した。

四畳半ニハ、客二人、壺畳半ニハ客三人と休(利休)御申候。

利休は、秀吉に仕え始めた頃から、茶室の造りを極端にまで矮小化していく。そしてその矮小化に反比例して、利休は「一期一会の、主(あるじ)と客との直の心の交り」の世界の拡がりを造りだしていく。研ぎ澄まされたような、美の極致ともいえる世界にありながら、のびやかな空間を一座の人々に現出していく。この危険なまでの美の世界への傾倒。利休によってのみしか、描きえない美と心の世界がここにある。

秀吉と利休とは14、歳が違った。秀吉はこの利休を相手にする時、心おきなくわがままが言え、また好き勝手に振る舞えるのであつた。秀吉は信長在世の折り、京都の奉行に任せられたことがあつた。この時の京の公家人達との付き合いは、何時までも秀吉の心のなかに苦々しい思い出として残った。「京のしきたりも何も知らぬ田舎のサルが」、「なんといやしげな立居振舞よ」と面と向かって声には出さないが、目の奥底に意地悪く宿る、蔑みとあざけりの陰湿な含み笑いが、出自の卑しい秀吉には耐えがたかつた。このような公家達を難無くあしらひ、そればかりか各地から伺候する諸侯を手際よくもてなし、さばく利休の存在は、秀吉にとって全くもって重宝であつた。

この利休が、突然秀吉の不興をかい切腹を命ぜられた。利休70歳、秀吉56歳のことである。この唐突な死が、後世に利休の存在を際立たせる大きな要因となっているように思える。

利休の死の真相は何か!!



第14話「大阪城 その4 秀吉と利休 1」完

図書館活用の手引き②

A V室がオープンしました!

新鋭設備が自由に利用できます

中央図書館に新しいサービスルームが誕生しました。名づけて「図書館A V室」。玄関ロビーから廊下に入ったすぐ左手にあります。ここでは、落ちついた雰囲気の中で各種の視聴覚(Audio Visual)資料を自由に閲覧することができます。

配置されている機器は、ビデオ装置4台、カセットデッキ2台、レーザーディスク2台、CD-ROM1台のほか、衛星放送と文字放送が受信できる大型テレビ1台(ビデオ・レーザーディスクの装置搭載)で、ささやかながらニューメディア時代に対応した構成となっています。

利用できる時間・要領等は、次のようになっています。

[利用時間等]

利用時間	利用形態	人数
9:15 ~ 11:30	グループ利用 (予約制)	原則として 2~10名以内の 小グループ
12:30 ~ 21:00	個人利用	機器1台につき 原則として1名

[要領]

- (1) 利用したいA V資料を収納棚から取り出し、学生証とともに係員に提示し、ヘッドホンを受け取る。

←← 編集後記 →→

○いよいよ読書の秋、スポーツの秋、芸術の秋ですね。あのベン・ジョンソンも、出場停止処分が解除となったようです。

○「花博」がその会期を終えました。鶴見緑地にどんな花の文化が結実するでしょう。十年後、二十年後が楽しみです。

○『才市』を執筆した水上勉が、ある大学の講演で、感性や言葉というものは、育った環境の中で既に身につけているもので、学校や図書館は、その感性や言葉をさらに磨く所であると――。

○寄稿していただいた皆様ありがとうございました。

- (2) 視聴は必ずヘッドホンを用いて行う。機器1台で同時利用できる人数は

☆ カセット・ビデオ・レーザーディスク……各2名

☆ 大型テレビ……………8名

☆ CD-ROM…3~4名(ヘッドホン不要)

- (3) 利用が終了後収納ケースに収め、ヘッドホンとともに係員に返却し、学生証を受け取る。

[その他留意事項]

- (1) A V室内の資料は、室内利用のみとし、館外への帯出はできない。
- (2) 館外帯出できるA V資料は、第1図書室に配架しているカセットテープのみとし、帯出手続は従来どおりメインカウンターで行う。
- (3) 資料の複写(ダビング)、私物資料の持込はできない。
- (4) その他利用については掲示物を参照し、係員の指示に従うこと。

只今のところA V資料の所蔵数は十分とは言えませんが、今後質量とも大幅に充実させていく予定です。

情報化時代の今日いかに効率よく有用な資料に到達できるかは、図書館利用に限らず、社会のあらゆる分野でのテーマであると言えます。そのためには活字メディアだけでなく、美しい映像や音声をダイレクトに実感できる視聴覚メディアや多量の情報量を効率よく利用できる電子メディアを使いこなすことが益々重要になってきます。

皆様の積極的な利用を期待しています。

学校法人大阪工大摂南大学図書館報

No.23 (1990. 10)

編集発行 大阪工業大学中央図書館

〒535 大阪市旭区大宮5丁目16番1号

TEL 06-952-3131